



自選「作家の旅」

水上 勉

● 1976・8・30・第一刷

● 著者 水上 勉

● 発行者 川崎吉蔵

● 発行所 株式会社 山と溪谷社

東京都港区芝大門一―一三三 郵便番号105

電話 〓 東京(03) 四三六―四〇二―*代表

振替口座 〓 東京八―六〇二―四九

● 装幀 井上敏雄

● 印刷所 明善印刷株式会社

● 製本所 株式会社明光社

自選作家の旅
水上勉

山と溪谷社

自選「作家の旅」水上勉
目次

自序——旅心について 7

冬の旅——15

山河巡礼——129

気比の松原 131

長府・小倉 144

近江三井寺 184

水尾 208

美濃谷汲 222

親不知 249

奥能登 267

湖北 286

与謝 304

越後郷本・出雲崎 322

失われゆくものの記 341

雪の中の瞽女たち 343

初出一覧 360

あとがき 362

口絵写真Ⅱ 丹後半島の寺々を訪ねる途中で――撮影・槇野尚一

自序
旅心について

六つか七つの時だ。母につれられてはじめて汽車に乗った。在所の村から三つ目の駅を降りて、山へ登った。その山の中腹にあった観音霊場の寺へ参籠するためだった。五月休みだったから、海のみえる沿線の山側の谷間は植えたばかりの水田が段になって、まだ黄味ののこる苗葉がゆらいでいた。海側は岬が多かった。トンネルがあった。トンネルを出ると、すぐ海が迫った。トンネルのない所は田圃だった。汽車の速度が

のろいものだから、至極緩慢に、進行方向から立ちあらわれる新しい景色が、すぐうしろへ捨てられていった。のどかなこの変容は子供心におもしろく、車内の人ごみを背に窓ガラスに額を押しつけ、ただ不思議な世の中を見守るばかりだった。たぶん、母には連れがいた。ぼくのような子供もいたはずだった。五月休みは、苗代から本田へ苗をうつし終え、一番草をとるまでの一日を、申合せての休日だったように思う。セルという着物が流行していた。あめ色がかったあの毛織物は、素肌につくとかゆかった。男も女も、子供も、みなこの日にあれを仕立ておろしていた。汽車の中はナフタリンくさかった。

ぼくは、ぼくの村と似た村が、立ちあらわれては消えるのを不思議に思いはじめていた。ぼくは、ぼくの住む村のように、くず屋の多い部落は、ほかにないことだと思っていた。また、ぼくの家のように、ペンペン草の生えた山裾の陽蔭の家などは、よそにはないだろうと思っていた。ところがそうではなかった。似たような家のかたまる村々が、山の迫る谷にへばりつくようにして立ちあらわれては消える。そこには牛もいた。馬もいた。もちろん、五月休みは、各部落勝手な申合せだから、

休みでない部落は田へ出ていた。大人たちの頬かむりした野良姿があった。遠目ながら働く人たちもぼくの村の連中に似ていた。竹藪の多い村を見た。山の木がすっかり伐りはらわれ、裸になった真下に、陽当りよく瓦屋のむれを光らせている村もあった。せまい谷の奥に、こんもり椎や樺の森がみえる。たぶん、そこは、ぼくらの村にもある郷社なのだろう。宮の森には、落雷のためか、梢の枯れた大杉が一本、灰いろの棒をつきたてたようにみえる。これもぼくの村の社と同じだった。高い木はみな雷の傷があるものだった。見あきないけしきである。そしてそれは汽車が教える、ぼくにとって、はじめての他所というものだった。まだ、子供だったから、ここに、旅心が光っていたとまではいわない。他所を見ることがの好奇と楽しみが胸をわくわくさせたのである。

ところで、ぼくはこの時、あるけしきをみて、息をつめたものだ。それは赤土の露出した山裾の新道だった。一方は山で、一方は水田になっていた。汽車は水田の中をまっすぐに走っているから、山際はよく見える。新しい一本道を汽車と同方向へ、走る女がいた。女は男を背負っていた。たぶんその男は子供ではなかった。大人だった。女は髪ふり乱し

ていた。どこへ走るのが。野良着でもないから、あるいはこの汽車に乗るつもりで駅へ走るのがもしなかった。いや、それなら無理というものだった。汽車と競争して人間が勝つはずはなかった。女はまっしぐらに、男を背負って走っていた。とみる間に、汽車はトンネルへ入って女の姿は消えた。それだけのことだった。赤土の露出した山の道を、走っていた女は病人を医者へつれてゆくのもしれなかった。子供心にトンネルがきてからそう思ったが、しかし、トンネルというものは、先きに見た世界をあっさりと黙殺して、暗闇となるのだった。眼にうつったものへの執着と好奇はかすかに心をかきたてていて、残りの像を愛惜しているはずだが、暗闇がすぎるとまた新しい野原の見える世界がひらけてくるのでまた心がはずむのである。

ぼくは、いつまでも、瞼のうらに、この走っていた女の像を影み、わすれていた車内の人ごみに眼をうつした。眠りこけている人もいた。ベちゃくちゃしゃべっている人もいた。何か喰っている人もいた。五月は人が出る季節だった。外けしきに無関心な人には、走る汽車の中で、ぼくがみた光景を誰が見たとはいえなかった。かすかな喜びのようなも

のと、淋しさのようなものがぼくを襲った。ぼくだけが見たもの。トンネルとトンネルのあいだに垣間みたあの光景はぼくの旅のはじまりだったと思う。

六つか七つの時に、この何げない車窓から眺めたけしきを、ぼくは心の奥にふかく焼きつけてきた。それと似たような赤土の露出した山の道の見えるところへくると、いつも再現してみた。髪ふり乱した女が、男を背負って汽車と同じ方向へ走るのである。

人はどうか知らぬ。ぼくには六つ七つの頃から九、十ぐらいまでのくらしが、たとえていえば精神の根雪のように固く、心の奥に残って、じつに些細な、人にはありふれたこととしか思えぬことどもが、のちの放浪生活の途上で、これもとんでもない時間に思っておこされて、驚くようなことがしばしばあった。九歳で故郷を出て、京都の禅宗寺院の小僧となり、十九歳で脱走して、それから、父母を裏切った破戒僧、坊さまになりそこねた脱落の人間として、故郷へよりつかなかった。京都、東京、信州と転々して暮す身になったが、病的なといってもいいくらい、幼少年期のけしきをぼくは頑固に抱いてきている。

富裕な家に生れ、父母、姉兄弟にも囲まれて、余裕ある学生生活をおくったのち、社会に出て一本立ちとなった友人たちが、屈託なく、生れた環境について話してくれる時間に、ぼくも居あわせることがあった。そんな時、ぼくは友人にはすまぬがひそかに、捨て去ったぼくの故郷へ、狂うような気持へ帰っていた。人なみに幼少年期の環境を大切にしているのだといえばすむはなしかもしれぬが、といって、冒頭に書いた、はじめて汽車に乗った日の、走る窓から見たあの女の走る光景が、心の底にいつも光っているのはどういうことだろう。どう解説していいかぼくにはわからない。

人の一生は旅だ、といわれる。生れた日がすなわち、その人の旅立ちだというわけだろうが、とすると、人間はいつも孤独であって、生きるということは、日々、山や川や人々との別れなのだと思う。そういう考えをもてば、死んだぼくの父も、盲目だった祖母も、木樵だった祖父も、汽車の中からみた名もしらぬ、男を背負った女と同じで、ぼくの精神の遠い昔の風景の一つというしかない。生れた家にいた兄弟、両親の思い出はもちろん根づよいが、ぼくには親兄弟と同じくらいの濃厚さ

で、眼にのこっている人々のことが、いまも思われるのである。そうしてそれらの人々のことが、今は、五十七歳の日常生活の一瞬に思いおこされる時、あるときはなつかしきで、ある時ははずかしきで、ある時はにくしみになったりして思い出され、あとでまた記憶の根源へ閉じこめられる。

現実の旅は、このような日常からの解放でもあろうが、じつは解放どころか、汽車に乗り、バスに乗り、船に乗り、飛行機に乗りして遠くへ出かけても、身辺におきたことを思いおこしている、思いなおしたりしている。そこが外国であっても、小さな自分が置いてきた家郷を思っている。ぼくはせまい足はばで歩いているのである。

ぼくにとって、旅とは、ぼく自身を思いなおす時間である。そうして、その時間を、なるべく深く味わえる場所をぼくは喜んでいる。深く味わえる場所とは、ぼくだけのもののはずだ。ぼくの人生は、ぼくしかもっていない宝のようなものかもしれぬと、旅に出ていてふとそんな気持になる。淋しいことも、死にたいとまで思いつめるようなことでも、旅の朝は何でもないことのように思いなおされて、気持が生々しくて

るのである。ぼくはそういう旅人なのだと思う。

冬の 旅